

「ひきこもりの方を取り巻く現状と課題、今後の展望」

「ひきこもりを理解する」

家や自室に閉じこもって外に出ない若者の「ひきこもり」は、全国で七十万人に上ると推計されています（平成二十二年七月内閣府による全国実態調査結果より）。また将来、ひきこもりになる可能性のある「ひきこもり親和群」も百五十五万人と推計され、今後さらに増える可能性がある指摘されています。

生きづらさを抱えた青少年の心

こんなはずではなかったのに……。何故自分だけがこうなってしまうのだろうか……。何故うちの子どもがこうなったのだろうか……。大切に育ててきた我が子が、あるときから学校や職場に通うことが出来なくなった時、親は戸惑い、何故なぜと原因探しをしながら、早く元へ戻してやりたい一心で、子どもに通えない理由や、早く戻らないと後々苦労することなどを伝えながら、あらゆる相談機関を訪れます。しかし、なかなか思うように進展せず、やがて家族の中だけで抱えてしまい、家族の力も失せて

家族が出来ること・家族だからやらなければならぬこと

子どもの状態（姿・年齢）ではなく、子どもの辛い心を受け止めることが一番大切ですが、親はどうしても子どもの年齢を意識し、焦りのために動くことが多く、子どもからの言葉も本音で伝わるのではないために、良かれと思つて動いたり、あれこれと言葉により刺激します。しかし、子どもにとっては両肩に重石を乗せられたようになり、親の願いに添えない自分は、親から見捨てられるのではないかと、言葉にならない思いで小さくなくついているはずで、子どもはいつになっても親に愛され認められたいと思つています。何故なら小さくなった自分には親しかいない。「こんな自分でも好きですか？」と聞いてみたいと思つているはずで、



しまします。

ひきこもりとは状態像であり特別な人ではなく、これまで元気に？（元氣に見えるが頑張つて）学校や職場に通つていた人が、ある朝突然「学校・会社に行こうと思つても、身体がどうしても動かない」状況になります。彼らは突然ひきこもるのではなく、それぞれの関わりの中で、徐々にストレスを溜め込み、頑張つてみてもこれ以上自分の力で対処出来なくなった状態で、自宅で過ごすことになるのです。こんな状態が続くことで、ひきこもり状態を作っていきますが、長くなればなるほど社会参加が難しくなってきます。また、今までのストレス（人間関係の中

子どもの心を心で受け止めることは、親にしか出来ないことです。そして兄弟もかけがない強い味方です。強い家族愛が子どもの心を回復させ、エネルギー（ガソリン）となり、やがて自分自身で飛び立とうとするのです。家族だからこそ大切な家族の一員をみんなが絶対守り、信じてあげる気持ちを持ち続けることが出来るでしょう。

ひきこもりからの回復のために必要なもの

子どもを含めて家族もエネルギー（ガソリン）がない状況の中で、回復に至るためには、家族への援助者と子どもへの援助者（伴走者）の双方が必要です。家族の不安を取り除き、希望を見い出す支援と一歩ずつ確実に子どもの回復に繋がるための支援が、一日も早い回復へとつながるのです。

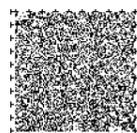
まずは、家庭の中に安心と希望が見えてくるためのたくさんの工夫が必要です。安心して過ごす環境を整うことで外に関心が出来ます。同時に彼らが社会復帰を果たすためには、通常

プロフィール

社会福祉法人わたげ福祉会
NPO法人わたげの会
理事長 秋田 敦子氏



昭和26年4月12日生まれ
音楽講師をしながら高齢者施設・障害者施設で音楽療法ボランティア（活動歴20年）
平成9年「NPO法人わたげの会」開設
平成16年4月「社会福祉法人わたげ福祉会」設立
【役職】
地域生活支援センター「ほわっと・わたげ」施設長
仙台市太白区社会福祉協議会理事
仙台厚生病院厚生会評議員
宮城県立こども病院理事



での気疲れ・心配・不安・頑張らなければ……などを避けようとして自宅へひきこもるけれど、また別の心配や辛さを受けて身動き出来なくなる場合が多くみられます。家族への申し訳なさや同世代との差を常に感じては、自分を責めたり親へ不満をぶついたり、家庭の中が一変してしまします。

子どもの心を知る「こと」から

どの子一人とつても、家の中でずっと過ごしたいと思つていくわけではありません。仲間と一緒に歩んできたことを思い、一緒に歩んでいきたいと常に思つていても、頑張ろうと思えば思うほど動けなくなっていく自分

（ニンゲ）と、長期的な視野に立った様々なプログラムやメニューを用意する必要があります。中断した月日を様々な体験・経験で埋めることで、彼らは堂々と社会参加出来ることでしょう。そのためには苦手と思い込んでいる「人」の中に身を置くことが求められますが、いつか必ず、たくさんの人と出逢えたことに感謝する日が訪れます。やがて人との関わりが自分を逞しく変えてくれ、人によって人は育つことに気が付くはずで、

地域の中で育つた子どもを地域で支えることの大切さ

私たち大人が子どもだった頃は、遊び場は地域の中の広場や校庭・野原でした。様々な年代の子もたちと一緒に、子どもは風の子」といわれるくらい外でよく遊び、地域の大人から褒められたり叱られたりしながら、地域の中で見守られながら育ちました。遊び道具もあまりなく、自分たちで考え、工夫し、協力しながら遊びました。今は子どもが望んだというより、近代社会が生み出した文化なのでしょ

が在ることを、親になかなか伝えることが出来ず、助けて欲しいことも言えず、一人で何とかしようともがいているはずで、親に認めて褒めてもらいたい一心で、子どもは頑張り続け、弱い自分を見ることが出来ないのです。親にも周りの人にも相談できずに一人で頑張り続け、気がついてしまったのです。このことを知って早急にエネルギー（ガソリン）を給油していたら、ひきこもらずに済んだかもしれませんが、子どもたちはゼロになるまで頑張り続けたのです。親に心配をかけたくないという一心で……。

うが、人間と遊ぶことより機械（パソコン・ゲーム・携帯……）相手に遊ぶことを好むようになり、その結果、コミュニケーションがとれないと悩む若者が多く見られるようになりました。「人」は苦手だが、「人が気になる」という現象が多い中、人を排除して生きることは不可能ということも知っているはずで、一度考えていく必要があるのではないのでしょうか。地域の中で少しづつでも「言葉」が多く飛び交うようになつたら、地域で育つ子どもたちに逞しさと安心が育まれることと思えます。

そして何より、子どもは、親の無条件の愛を心で感じ、確信したときに、何ともいえない安心感と安堵の気持ちを持ちながら、外へ飛び立つことが出来ることでしょう。

（寄稿）

